‡ 地域振興「北海道の６次産業化の取組み」５（再掲）‡

６次産業化認定者の取組事例
厚真町を日本一に！ハスカップがつなげる地域ぐるみの取り組み

厚真町　山口　善紀

北海道農政事務所生産経営産業部事業支援課　中島（なかじま）　忍（しのぶ）

ハスカップは主に勇払原野に自生している植物ですが、ハスカップを栽培している多くの農家はその自生している木を持ち帰り自分の圃場に移植して栽培･収穫をしているとのことです。そのため、千本の木があれば千の種類があるとも言われています。

また、収穫についても順番はその農家しか判らないなど、野生の植物を移植し栽培しているからこその難しさもあるようです。

山口さんの農場でも、同じように移植してきた約千本の木があり、山口さんのお母さんは、小学生だった山口さんたち息子の味覚を頼りに、そこから味の良い大きな実を付ける木を品種選抜していったそうです（写真１）。そうして残された木の中から、山口さんは「あつまみらい」「ゆうしげ」という２つの品種を自ら登録してきました。

写真１　　ハスカップの実

ハスカップを栽培しこれまで卸売や直売、収穫体験やハスカップジャムの販売などによる経営を行ってきた山口さんですが、付加価値がまだ十分に付けられずにいると考え、平成 25 年 10 月にハスカップの加工品の製造販売として総合化事業計画の認定を取得しました。

事業計画の内容としては炭を使った真っ黒い生地に白いホイップクリームとハスカップソースを入れた見た目にもインパクトのある「ハスカップクレープ」（写真２）を移動販売車（写真３）を使って札幌をはじめ地域を含めた周辺のイベントに出向いて販売を行っています。当初は生地に練り込む炭も地元で生産していたものを使う予定でしたが､廃業のためあえなく断念。６次産業化の取り組みも地域ぐるみで行おうとしたことがうかがえます。

写真２　ハスカップクレープ

また、自ら品種登録した「あつまみらい」「ゆうしげ」を町外に持ち出さないという約束のもと販売を行っています。購入した農家は町内で自由に挿し木をして増やしても構わないという地域ファーストの考え方を貫いています。そん

本記事･画像･写真を無断で転載することを固く禁じます。

な、山口さんの地域を考えた地道な努力が実を結び、厚真町はハスカップの栽培面積を日本一となりました。

写真３　　移動販売車

そして、これまでの様々な取り組みが評価され、第 10 回コープさっぽろ農業賞で北海道知事大賞を受賞されました（写真４）。

特に個人での取り組みではなく、地域を巻き込んだことに対しての評価が高かったとのことです。

写真４　　コープさっぽろ農業賞
北海道知事大賞を受賞した山口さんと奥様

６次産業化の取り組みについては、当初は移動販売車で毎日営業を行うなどしていましたが、売上げよりも人件費が嵩んでしまったり、加工品を製造してみたものの製造原価が高くなってしまうなど、実際に取り組んでみての製造・販売に関する難しさを経験したようです。そこで 29 年度に「フード塾」に参加して、販売についてのノウハウを取得し、自らの販売に繋げていますが、勉強をしていくなかでこれまで販売に関する知識が無かったことを痛感したそうです。今後、６次産業化に取り組みたいと思っている農林漁業者には、「まずは研修などに参加して販売に関する知識を習得しなければ、事業を上手く進めることは出来ない」との思いに至ったそうです。

このように、事業に向けた課題を一つ一つクリアしていくことで、６次産業化の取組も進み、収益力の向上と農業経営の改善が図られています。

山口さんの６次産業化の取り組みや苗木の提供については、当初お母さんから反対されたとのこと。しかし、いろいろと実績や形となって現れてくることで、「こう言うやり方もあるのか」と今では理解を示してくれているとのことです。

今後は、自らの６次産業化の新商品開発もありますが、地域としては「あつまみらい」「ゆうしげ」の規格外品について、現在はその他の品種と差別化されておらず付加価値をどのようにして付けて販売していくのか課題となっています。そのための取り組みの一つとして、「厚真産ハスカップ」の全国的な知名度の向上への取り組みや研究機関との機能性の研究も行っているところです。山口さんの地域を巻き込んだ取り組みに今後も期待をしたいと思います。

※この記事は第 13 巻 4 号に掲載しましたが、編集段階で写真の挿入ミスがあり再掲しました。関係者の皆様には深くお詫び申し上げます。

本記事・画像・写真を無断で転載することを固く禁じます。